

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
伊藤 いつ	女 性	25 歳	豊橋市 (設楽町田口)

「孤児のK子ちゃんのこと」

「東三河郷開拓団からの手紙」より

戦争のために起きた悲しい事実を書いておきます。

昭和20年の初冬のある寒い日、主人が一人の女の子を連れてきました。駅のあたりの難民収容所^{なんみんしゅうようじよ}で、見知らぬ開拓団の人から女の子をしばらく預かってほしいと頼まれたというのです。私たちも人様をお世話^{よゆう}するような余裕などありませんでしたが、かわいそうなのでお預かりして2歳^{さい}の長男のお守りをしてもらいました。そして1ヶ月ほどしたでしょうか、むこう様から返してほしいというので、一枚しか残っていない私の羽織でモンペと上着^ぬを縫ってあげました。喜んで着て帰ったのもついこの間のように思われます。

けれど、そのK子ちゃん、名前も忘れてしまったけれど、秋田出身で6年生でした。そして、昭和20年8月15日以後しばらくまでは両親と弟妹がおり、普通の開拓団の子供^{こども}だったのです。それが戦争に負けたと知った大人たちが将来を悲観したのでしょうね。毎日毎日集会を開いて話し合ったあげく、全員自決と決まったのだそうです。ある日、小学校に開拓団の人たちが全員集まり、それぞれの家族がしっかりと抱き合^だってみんなで泣いたそうです。自決の時間はもう目の前に迫っています。お父さんやお母さんはさぞ辛かったでしょうね。K子ちゃんはお父ちゃん、お母ちゃん天国で仲良く暮らそうね、とみんなで強く手を握^{にぎ}り合ったその時、教室いっぱい^{いっしゆん}にまかれた石油に火がつけられ、目の前が一瞬パッと明るくなった。そこまでは覚えているけれど、気がついた時は校庭に立っていたと言いました。

無意識のうちに飛び出した何人かの大人たちについてチチハルへ、チチハルへと歩いてきたのだそうです。自分一人ではどうにもならないK子ちゃん、出身地の秋田へ無事引き揚^ひげてこられたでしょうか。初老の中国に残された孤児^{こじ}をテレビで見ると、ふと思い出されます。



奉天へ一人たどり着いた少女

「飯山達雄 引揚げの慟哭より」

平成2年11月1日

(記録者 今泉 麻衣さん)